

タイトル:平成 23(2011)年度 研究セミナー

日程:平成 23 年 12 月 19 日(月)～21 日(水)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階 マルチメディアセミナー室(306)

「私の博士論文」

福島 康博(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・研究機関研究員)

発表者は、2006 年 9 月に博士学位請求論文を提出、2007 年 3 月に博士号を取得したが、大学院在籍時に感じていたことや博士論文執筆時のことを中心に、学部卒業から現在までの経緯を発表した。

大学院での学びと博士論文執筆のあり方は、進学した大学院、所属した研究室、および指導教官の方針などによって大きく左右されるであろう。例えば、同じ指導教官の下にしている先輩・後輩や同期の院生の人数が多ければ多いほど、研究室のゼミや飲み会などで熱い激論を戦わせることを通じ、お互い切磋琢磨することが可能であろう。また、学振への申請方法やアルバイトの融通といった情報が手に入るかもしれない。しかしながら、その分指導教官と接する時間が少なくなり、「論文を見てもらえない。コメントがもらえない」という悩みを抱えることにつながる。進学した大学院の規模が大きければ、学会や研究会の開催校として雑用を押し付けられて煩わしい思いをするかもしれない。だが、学会や研究会の運営ノウハウは、職業研究者として身につけておくべき技術の一つであるから、早いうちに訓練を積んでおくことは、決して無駄なことではない。また、研究内容によっては、特定のテーマを深く掘り下げるものもあれば、むしろ学際的な知識を要する場合もある。どのような授業を履修できるか、どの先生からアドバイスを得られるかは、進学した大学院のカリキュラムや教員の布陣に依存することになるだろう。

発表者の場合、①大学院の規模が小さく、イスラームを専門とする教員が少なかった反面、経済・経営学系から人類学系まで多様な授業を履修でき研究に幅を出せた、②研究室には院生が発表者一人だけだったため、指導教官からきめ細かい指導を受けられたものの、院生同士の議論や情報共有ができなかった、および③指導教官の定年退職時期が決まっていたため、それまでに博士論文を完成させないと博士号が取れない恐れがあった、という状況に身を置いて院生時代をすごした。指導教官から懇切丁寧な指導を賜ったことは大変幸運であったが、同じ研究室に院生がいなかったがゆえに先輩・後輩といった関係を築けなかったことは、今でも心残りである。このような私のたどった道は、もしかすると受講生がたどっている道とは異なるかもしれないが、自らの置かれた状況の中に長所を見出すとともに、足りない部分が何であるかを自覚しそれを補う努力をしていただければと感じるところである。

発表者の博士論文執筆は、非常に限られた期間内で行われた。具体的には、2 年間のマレーシア留学から帰国した 2005 年 4 月より取り掛かり、同年 7 月の第 2 次口頭試問を経て、翌 2006 年 9 月に完成させて大学院に提出するというスケジュールで、実質的には 1 ヶ月につき 1 章のペースで執筆していた。こうした急ピッチな執筆が可能であったのは、①留学時における十分な資料収集、②もともと多くの時間を費やして作成した序論と章構成の周到さ(本論を執筆しながら随時変更を加えていったが)、および③上述のような「指導教官の退官までに間に合わないと博士号が取れない」という強い動機付け、などがあったからであろう。もちろん、「十分な資料の収集、査読付論文による実績の蓄積、納得のいく

考察、これらが揃わない限り博士論文は書かない」という態度もありうるだろう。しかしながら今日の若手研究者を取り巻く環境、とりわけより早くより多くの業績を挙げることが求められていること、研究は博士論文をもってゴールとするのではなく一通過地点にすぎないこと、といった点を勘案すれば、自分になりものを嘆くよりはむしろ今あるものでどう書けるかに腐心する方が、博士論文執筆の早道である。

発表者は、大学生の頃よりイスラームと経済の関係に興味を持ち大学院に進学したのだが、修士課程ではそのテーマの中からイスラーム銀行を選び、博士課程ではさらに地域を絞ってマレーシアを取り上げた。博士論文で最も重要な要素はオリジナリティーであり、これは①問題・テーマ設定(=序論)のオリジナリティー、②使用する資料・分析手法(=本論)のオリジナリティー、および③結論のオリジナリティー、という3つのパターンのいずれか(あるいはこれらの複合)によって打ち出すことが可能であるが、発表者の場合は商学部商業学科出身であったため、意外にも大学生のときに学んだ内容・研究手法が、①と②によるオリジナリティーの提示に役立った。

本研究セミナーの受講生による報告を拝聴したが、本人に自覚があるか否かは別にしてもそれぞれに個性があり、またすでに各人固有のテーマやツール(=オリジナリティー)を持ちえているように感じられた。あとは、どのように博士論文という形に仕上げるかにかかっているであろう。発表者の経験が受講生の皆さんの心に少しでも響くものがあれば、本発表は意義あるものであったといえよう。